

峠祭祀・雑感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2980

金沢大学考古学研究室 2005年12月10日

金大考古 第51号

峠祭祀・雑感

桜井 秀雄

1. はじめに

古墳時代の祭祀を考える上で、峠祭祀の存在は欠かすことのできない重要なものである。しかしながら、その祭祀の実態については不明な点が多いのも確かである。そこで本稿では、峠祭祀に関する諸問題を整理し、今後の研究の課題を提示したいと考えるものである。

2. 祭祀が行なわれた峠はごくわずかである

—古東山道との関連性—

日本には約1万におよぶ峠が存在するというが(市川1984)、古墳時代の祭祀の痕跡が考古学的に認められる峠は、ごく少数である。古墳時代の祭祀を最も特徴づける遺物である石製模造品が出土する峠は、岐阜県と長野県境に位置する神坂峠、長野県北佐久郡に位置する雨境峠および瓜生坂、長野県と群馬県境に位置する入山峠を数えるにすぎない。

この神坂峠から入山峠を経るルートは、こうした峠祭祀の存在をもって、古東山道に比定されている(大場1983)。この見解に異議を唱える論はほとんどなく、古東山道と石製模造品を用いた峠祭祀は密接な関連性をもっているといつてよいであろう。

時代は下るが『万葉集』からは、他にも相模国の足柄山、大和国の奈良山・逢坂山、周防国の磐国山などで、手向けなど峠の通過儀礼を行なっている事例を少なからず知ることができる。こうした「手向けの幣」を捧げる祭祀儀礼は古墳時代にもみられたと私は考えるが、しかしながら、これらの峠で古墳時代に石製模造品を用いた祭祀が行なわれた痕跡はほとんどみられな

い。足柄山については、奈良平安時代の須恵器片が鳥居竜蔵氏により発見され、また直良信夫氏が周辺の乙女峠の麓で剣形品1点を採集したとのことであるが、詳細は不明である(楢山1991)。

ところで、峠祭祀においては、石製模造品を「手向けの幣」であるとする見解が一般的であるが、私は「手向けの幣」とは、着物をはじめとする布類が主体であり、石製模造品はあくまでも祭具のひとつであることを論じている(桜井2002)。石製模造品から布類へと「手向けの幣」が変遷していったわけではないのである。

『万葉集』には、神坂峠についても「ちはやぶる神のみ坂に幣奉り齋ふいのちは母父がため」という埴科郡主帳神人部忍男の歌があり、神坂峠でも「手向けの幣」を捧げたことがうかがえるが、手向けの儀礼と石製模造品を用いた峠祭祀は、まったく別物と考えるべきものである。

つまり、石製模造品を用いた峠祭祀は、峠であればどこでも行なったものではないのである。

以上、石製模造品を用いた峠祭祀は、古東山道という交通に関連したものであることをここで改めて指摘しておきたい。

3. 石製模造品はどこで作られたか？

—未製品の存在—

峠祭祀で用いられる石製模造品は相当量の出土をみる。神坂峠では、白玉約900点、剣形品約310点、有孔円板約60点、勾玉約15点、斧形1点、鎌形1点、鏡形1点、馬形2点などの石製模造品が、また入山峠では、白玉273点、勾玉5点、有孔円板37点、剣形品約170点、刀子形数点などの石製模造品が出土している(阿智村教育委員会1969、軽井沢町教育委員会1983)。また、雨境峠ではかつては草刈の男女が1日に数十個は得たほどの採集量があったという(大場

1967)。

さて、これらの多量の石製模造品はどこで製作されたものなのであろうか。その生産・流通の実態はいまだ不明であるとしかたええないのが現状である。その原因のひとつには、長野県内における石製模造品製作遺跡の僅少さがあげられよう。長野県内では石製模造品製作遺跡は長野市本村東沖遺跡・坂城町東裏遺跡など数遺跡を数えるのみであり、しかもその規模も小さいものばかりである。群馬県をはじめとする関東地方とはその数も規模も及ぶところではない。

このように未解明な点の多い峠祭祀における石製模造品の生産・流通であるが、ここで注目したいのは、神坂峠と入山峠では未製品が認められていることである。

神坂峠の未製品には、剣形品で未穿孔・未整形段階にあたる 52 点、有孔円板では研磨段階・未穿孔段階の数点、勾玉では形割段階・側面切削段階、研磨段階の 9 点、白玉では未穿孔段階の各段階のもので 9 点がみられている。

入山峠の未製品には、未穿孔段階の剣形品、形割段階・側面切削段階の勾玉、形割段階・未穿孔段階の有孔円板があわせて約 40 点、形割段階・未穿孔段階の白玉約 45 点がみられている。

神坂峠・入山峠ともに製作工房や工具の発見はないが、このように決して少なくはない未製品の存在は、もちろんすべてが峠で製作されたものとは考えられないものの、峠においても製作された可能性を示しているのではなかろうか。

こうした未製品の存在について、神坂峠の報告書では、「或いは未製品のまま奉獻したとの解することも出来よう」(阿智村教育委員会 1969) と記しているが、私は、石製模造品は榊の枝などに吊るすということが大きな意味をもっていたと考えているため、この見解には同意できない(桜井 1996)。

以上、峠においても製作されていたことをここで指摘しておきたい。

4. 祭祀を行なったのはだれか？

さて、それでは峠祭祀をとりおこなったのは誰であったのであろうか。

峠という交通に関係する場所であることから、峠の荒ぶる神に対して「旅人」が行なったものであるとの

見解がとられることが多い。しかしながらこの「旅人」は単なる民衆層であったとは考えられない。大和政権による政治的・軍事的行動に伴う際に行なわれた祭祀であると私は考えている。こうした私の論は以下の 3 つの論拠からなるものである。

① 石製模造品は民衆層が生み出した祭祀遺物とは考えにくいこと。

石製模造品の出現の時期についてはまだ定まった評価はでていないが、寺沢知子氏は 4 世紀後半(布留 3 式・五領 3 式)頃と論じている(寺沢 1990)。そして 5 世紀代から 6 世紀前半に盛行する。この時期は大和政権の勢力拡大の時期にあたり、石製模造品の盛行と一致しているといえよう。

梶山林継氏はかつて「古代祭祀遺跡の分布私考」において、遺物の地域的特色がほとんど認められず、祭祀方法が斉一性をもっていたこと、長野県以東、仙台付近以南に濃密に分布すること、東国では古代主要道路にそって分布していることなどの祭祀遺跡の分布の特徴を指摘し、石製模造品を用いた祭祀は「意識的に分布させられた文化」であり、そこに大和政権の軍事的な意図の存在を理解した(梶山 1965)。

また寺村光晴氏は、石製模造品の出土が僅少である北陸地方にあって、石製模造品が認められるのは、ヒスイ産地およびその周辺の地に存在する石製模造品製作遺跡であり、ヒスイ生産遺跡と重なっていることから、ヒスイ生産遺跡とともに大和政権の支配を受けていたことを論じている(寺村 1995)。

一方、集落遺跡における石製模造品は、5 世紀代から集落形成が始まる、拠点集落でまず出現することが指摘できる(桜井 1993)。なお、子持勾玉をとりあげて私はかつて、その住居跡出土の事例を検討したことがあるが、やはり石製模造品と共通した出現のありかたをしているといえる(桜井 2004)。

以上のような論点からすれば、石製模造品は大和政権の影響下に流布したものであり、したがって石製模造品が民衆層により生み出された祭祀遺物とは考えがたいと私は理解するものである。

石製模造品がこうした性格をもつのであるならば、石製模造品を用いた峠祭祀についてもやはり大和政権の関与なくしてはできないと考えざるをえないであろう。

② 前々項で指摘したように石製模造品を用いた峠祭祀は、古東山道沿いにしか認められていないこと。

古東山道とは、令制に基づき整備された五畿七道のひとつである東山道の古道であり、大場磐雄氏によれば、東山道の原型は古墳時代においてほぼ出来上がっていたとされる（大場 1983）。古東山道の推定ルートは石製模造品を用いた峠祭祀の存在をその最大の論拠としている。前述の通り、石製模造品は大和政権の関与のもとで出現したと考えられ、またその盛行する時期も大和政権の勢力拡大期と軌を一にしている。

また長野県内の古東山道の推定ルートは、令制の東山道ルートよりも険しい峠越えを伴うもののその分、近距離をとっており、このことから政治的・軍事的色合いが強いプレ官道であることはいえるだろう。

さらに前述したように手向けの儀礼を行なう峠は『万葉集』には幾例もみられるが、石製模造品を用いた峠祭祀を行なう峠は古東山道沿いに限られているのである。このことは、石製模造品を用いた峠祭祀が、民衆層による自然発生的な祭祀ではないことを示しているといえよう。

③ 入山峠と神坂峠では石製模造品を製作していること。

前項で入山峠と神坂峠では石製模造品を峠において製作している可能性が高いことを指摘した。もちろんすべての石製模造品が峠で製作されていたのではないだろうが、峠においてある種、自給自足的なありかたをしていたことが推測される。このように峠において製作することは、個人的・ないし小集团的な一般民衆層に可能であったとは考えにくいではなかろうか。

また神坂峠では刀子形の石製模造品が出土しているが、これは古墳からの出土は認められるが、一般集落遺跡ではほとんど出土しないものである。この点も強調しておきたい。

次にこれと関連した問題のひとつに、こうした石製模造品を用いた峠祭祀は、西からの人々によるものなのか、あるいは東からの人々によるものなのかという問題がある。

桐原健氏は「4世紀代には信濃を通過した人々は残された土器から見れば西から来た人が多かった。」といい、それが「5世紀に入ると剣形・円板・白玉が奉斎されるが、剣形は東日本に厚く分布し、円板は西日本

にも及んでいるがやはり東日本に多い。そして、現在までのところ、信濃国内に石製模造品製作地が発見されておらぬ以上東からの人が勝っていたと見ざるを得ないだろう。」と論ずる（桐原 1991）。傾聴すべき見解ではあるが、石製模造品の種類組成からの判断は難しいではなかろうか。また長野県内に石製模造品製作遺跡が皆無ではないにしても少ないことは間違いないが、これがそのまま「東からの人々」によるものであるとする根拠は薄いといわざるをえない。

とはいえ、この問題に対する私の見解はいまだ定まっていない。今後の課題のひとつである。

5. 雨境峠の鳴石について

—巨石と磐座—

北佐久郡立科町に所在する雨境峠には、古墳時代に比定される鳴石遺跡・勾玉原遺跡・赤沼平遺跡・鳴石原遺跡・鍵引石遺跡・池ノ平遺跡・御座岩遺跡の7遺跡と中世に比定される法印塚・中与惣塚・与惣塚の石塚および賽ノ河原遺跡が確認されている。

このうち鳴石遺跡には、「鳴石」と呼ばれる巨石が存在しており、磐座（磐石）と考えられてきていた。

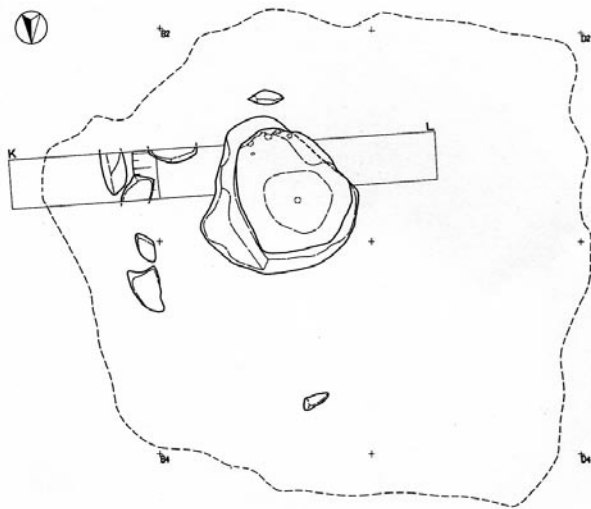
鳴石は青灰色角閃複輝石安山岩製の扁平な2つの巨石が、鏡餅状に積み重なったものである。そしてその周囲には部分的には攪乱を受けてはいるものの、南北10 m、東西11 mの方形プランを呈していると考えられる集石遺構が存在している。鳴石の下石は南北径295 cm、東西径306 cmをはかり、厚い舌状に競り出し、平面は隅丸三角形を呈する。上石は南北径235 cm、東西径218 cmをはかり、平面は楕円形を呈し、頂上部分に径12 cmほどの穴が穿たれている。これらの2つの



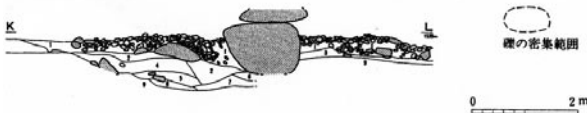
「鳴石」（平成 17 年 10 月 22 日撮影）



「鳴石」近景



1. 混土層、黒ボク土が主体。 2. 黒色土。
3. 褐色土。黒ボク土と9層の混合。
4. 褐色土。9層が主だが、灰、黒色土粒混じる。
5. 褐色土。4層より9層の混入多。 6. 黄褐色土。2層と9層の混合。 7. 黒色土。9層土粒混じる。
8. 明褐色土。わずかに炭粒混。 9. 黄褐色土。地山。



鳴石東側トレンチ実測図
立科町教委『雨境峠』より

石は、丸みのある自然石で、加工痕は見受けられない。ところで、平成5・6年に行なわれた発掘調査は、この鳴石について注目すべき知見を明らかにした（蓼科町教育委員会 1995）。

まず、この鏡餅状に重なった上石と下石については、「極めてよく似た自然石で、これをうまく鏡餅状に重ねているが、割れ目の各部位寸法は、外見的にも違いがあり、計測値によってもかなりの誤差がある。また鳴石の上下の石は、溶岩組織などにも差異があり、明らかに別の石を重ねたものと考えられる」と結論づけている。

そして、平成6年の調査では、東西方向に鳴石と集石遺構を横断するトレンチを入れた結果、まず、鳴石を据えるための掘り込みを行い、埋め戻しを伴いながら鳴石の下石が据え置かれ、その周囲に拳大程度の礫を積み重ねて集石遺構を構築していることが判明した。つまり、鳴石とその周囲の集石は人為的に構築されたものであることが明らかとなったのである。

このことは、鳴石は以前からその場所にあったものを磐座としたのではなく、おそらく据える場所を意識的に選定したことがうかがえるのである。

これだけの巨石をあえてその場所に据えた行為は、かなり強大な力の存在を示唆するのではなかろうか。鳴石は、石製模造品を用いた峠祭祀を行なうにふさわしい選地によるものなのである。

6. 今後の課題

以上、峠祭祀について私なりに問題点をあげてきた。峠祭祀については、その痕跡がたどれる峠は極めて少なく、またその実態も不明な点の多いことが指摘できよう。

さて、今後の研究の方向性としては、次の視点が重要であると考えられる。

まず、出土遺物について再検討する必要がある。石製模造品については、前述したとおり、未製品の存在が看過できない。ここから派生する峠祭祀に用いられた石製模造品の生産・流通の問題は周辺地域でのありかたや石材の原産地など、多方面から追求していかなければならない重要な課題のひとつである。また、土器については、その出土量が少ないため、アプローチの難しいところではあるが、器種分類や個体数の検討を改めて行なっていく必要がある。

次に、神坂峠と入山峠では古墳時代前期から峠祭祀の痕跡が認められるが、雨境峠では6世紀以降の遺物が伴うと考えられており、瓜生坂では石製模造品の形態から7世紀代の所産と理解できる。このように峠祭祀とひとことでいっても、その時期にはばらつきがある。時期差にかかわる問題については、集落遺跡での石製模造品のありかたにも注意を向けなくてはなるまい。石製模造品を用いた集落内祭祀も5世紀代、6世紀代、そして白玉のみによる7世紀代と、時期によってその祭祀形態は異なっていた可能性が高い。こうした知見をも踏まえた上で、今後の研究を進めていく必

要がある。

峠祭祀の存在は、祭祀研究においてばかりでなく、古道研究の上でも重要な資料を提供するものである。このように峠祭祀研究の重要性は、はかりしれないといえるだろう。今後は微力ながらも、これらの諸問題の解明に取り組み、峠祭祀の実態に迫りたいと考えている。

引用参考文献

市川健夫 1984 「峠の歴史と民俗」『日本民俗文化大系 第6巻』小学館
大場磐雄 1943 『神道考古学論攷』葦牙書房
大場磐雄 1970 『祭祀遺跡』角川書店
大場磐雄 1983 「古東山道の考古学的考察」『入山峠』
軽井沢町教育委員会 1983 『入山峠』

桐原健 1991 「道と峠の神まつり」『古墳時代の研究3』雄山閣
桜井秀雄 1993 「中部地方の動向」『古墳時代の祭祀 第I分冊』東日本埋蔵文化財研究会
桜井秀雄 1996 「石製模造品を用いる祭祀儀礼の復元私案」『長野県考古学会誌79号』
桜井秀雄 2002 「峠祭祀と石製模造品」『信濃54-8』
桜井秀雄 2004 「住居跡出土の子持勾玉」『金沢大学考古学紀要27』
梶山林継 1965 「古代祭祀遺跡の分布私考」『上代文化35号』
梶山林継 1991 「神坂峠」『神道考古学講座第5巻』立科町教育委員会 1995 『雨境峠』
寺沢知子 1990 「石製模造品の出現」『古代90号』
寺村光晴 1995 『日本の翡翠』吉川弘文館
藤沢平治 1967 「中山道瓜生坂祭祀遺跡」『信濃19-4』